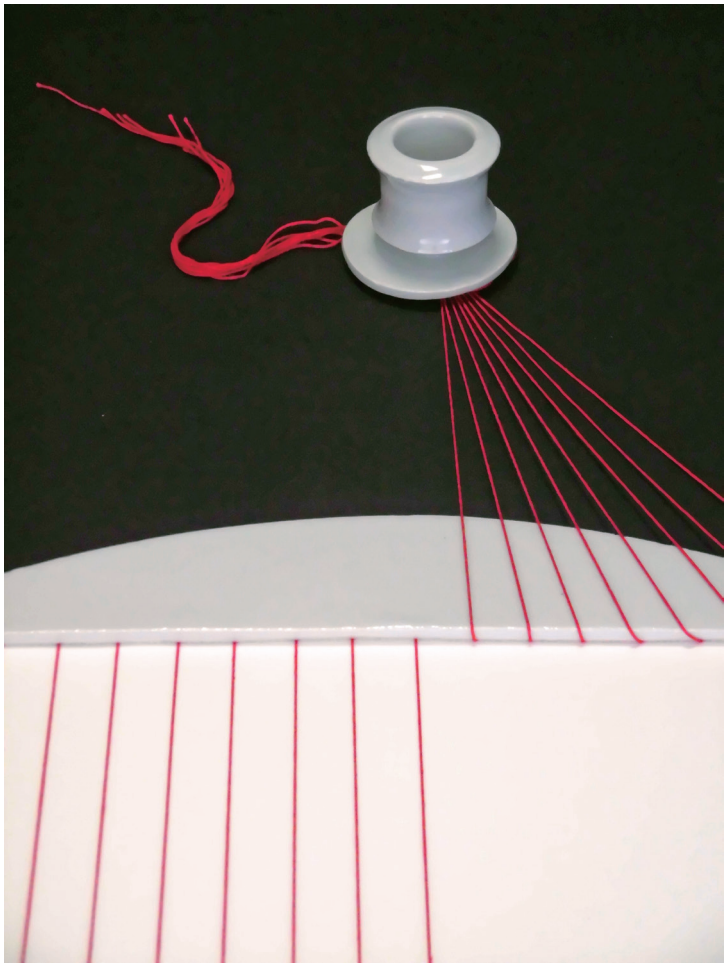
アートギャラリー

白　磁
＝益子の旅＝

石　田　成　昭

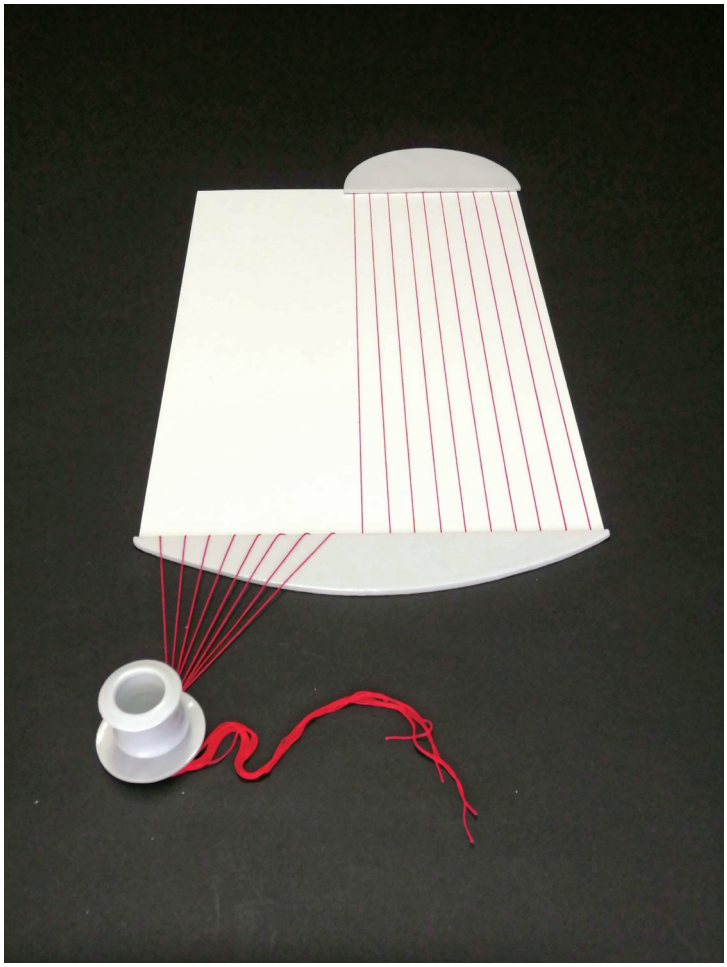


奈野５６１　　高 5cm

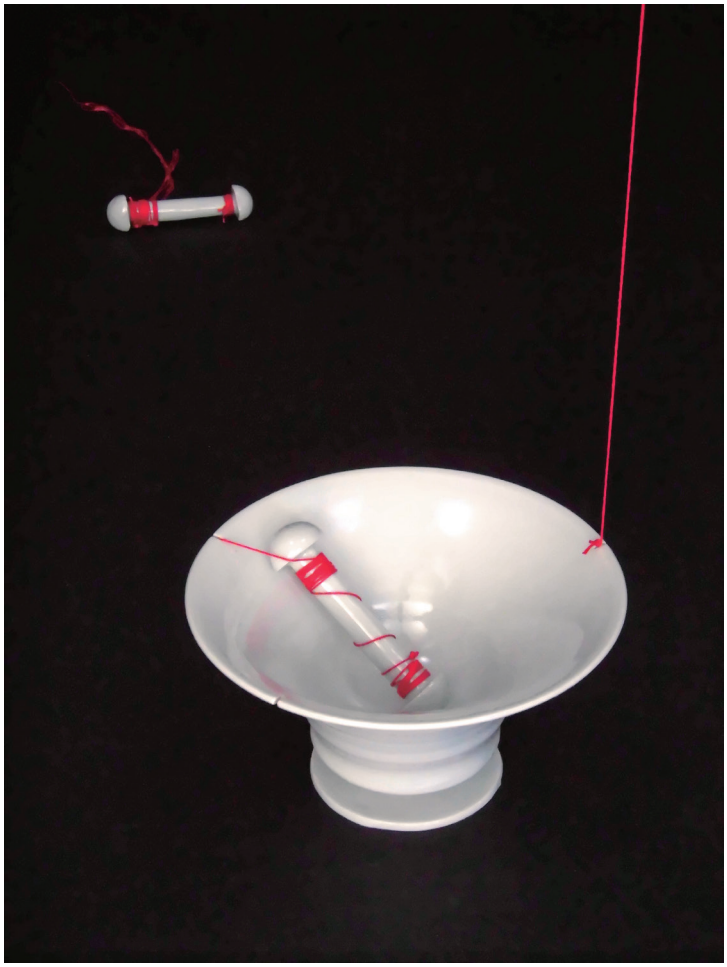
―益子の旅―

1968年秋、私が京都市立美術大学の３年生の時の事、上京した折に関東随一の窯業地・益子へ足を延ばした。東京からどの様に行ったかは記憶に無いが、意外に遠く３時間位かかった様に思う。車窓からは関東ローム層の赤茶けた風景が続き関西とは随分違うなと感じた。車中でアメリカ人の青年と出会い、聞くと陶芸家志望だと言う。これから濱田庄司の工房を訪問するが君も行くかと尋ねたら付いて来た。濱田先生は文化勲章受章直後で会って頂けないかもと少し不安だったが、京都の美術大学の学生ですと告げると「よく来た、上がれ」と笑顔で迎えて下さった。例のラウンド眼鏡、作業着姿で広い敷地内に点在する轆轤場、窯場を案内して頂いた。民芸運動の旗手であった濱田の作品は重厚かつ温もりがあり、懐かしい日本の原風景を見る様な気がする。後日何かの雑誌で読んだ話だが、濱田の一瞬にしてなされる杓掛けを傍らで見ていた人が「先生の仕事は15秒ですね」と言ったところ「60年と15秒だ」と即座に訂正されたと言う。モノづくりの核心に触れるこの返答は何とも痛快で嬉しくなってくる。外国人とはここで別れ、次に49才の若さで亡くなった今や伝説の陶芸家、加守田章二を訪ねた。大学の先輩で私達後輩は“カモさん”と呼んでいる。折よく遠野から戻っておられお目に掛かることが出来た。数人の先客があったが仕事場を案内して頂いた。美大の東山校舎にあった倒焔式の焚き窯とそっくりなのがあり、なるほどと納得した。その近くのテーブルに置いてあった面取りの丸壷がとても印象に残ったのだが、後々になって見たどの作品集にもそれが掲載されておらず、たぶん試作品だったのだろうと想像している。「化粧土の緑色を出すのに酸化クロムは何％入れるのか」と不意に聞かれ、私なんぞに妙な事を尋ねるなと思いつつ「３％位と違いますか」とあやふやな返事をした事を覚えている。緑色の化粧土を施した壷は今確かに作品集に収められている。日本人の魂を宿す数々の作品は見る者をこれからも魅了し続けるに違いない。今は亡き偉大な陶芸家ふたりと出会い短い時間ながらも言葉を交わし得た事はこの上ない幸運だったと思う。

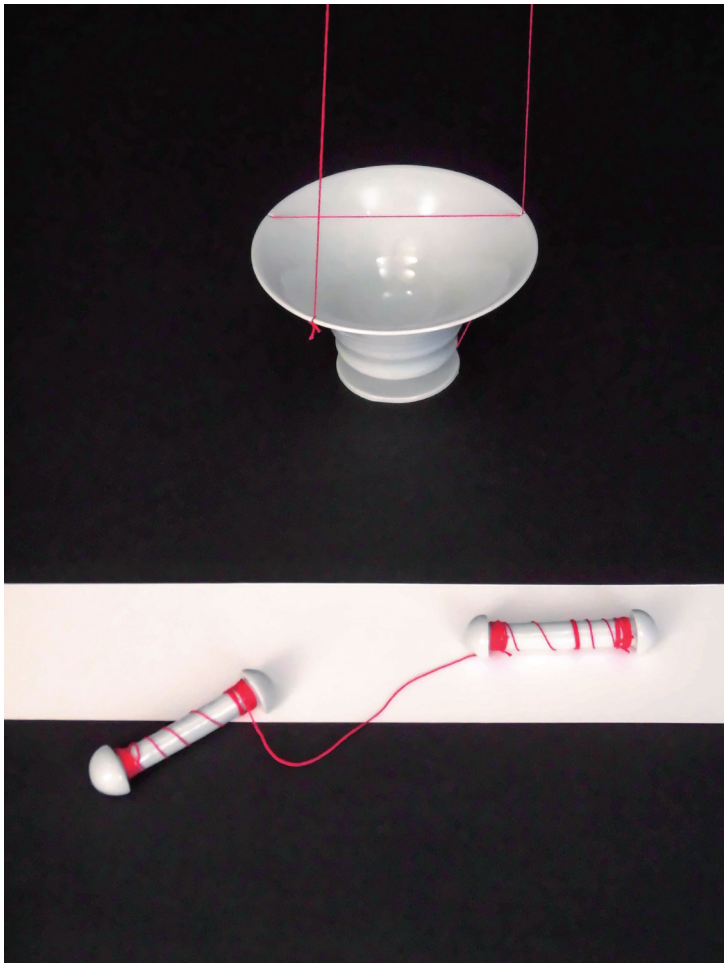
仰ぎ見る　益子の綺羅は　星ふたつ
スエ斯くあれと　導きたもう



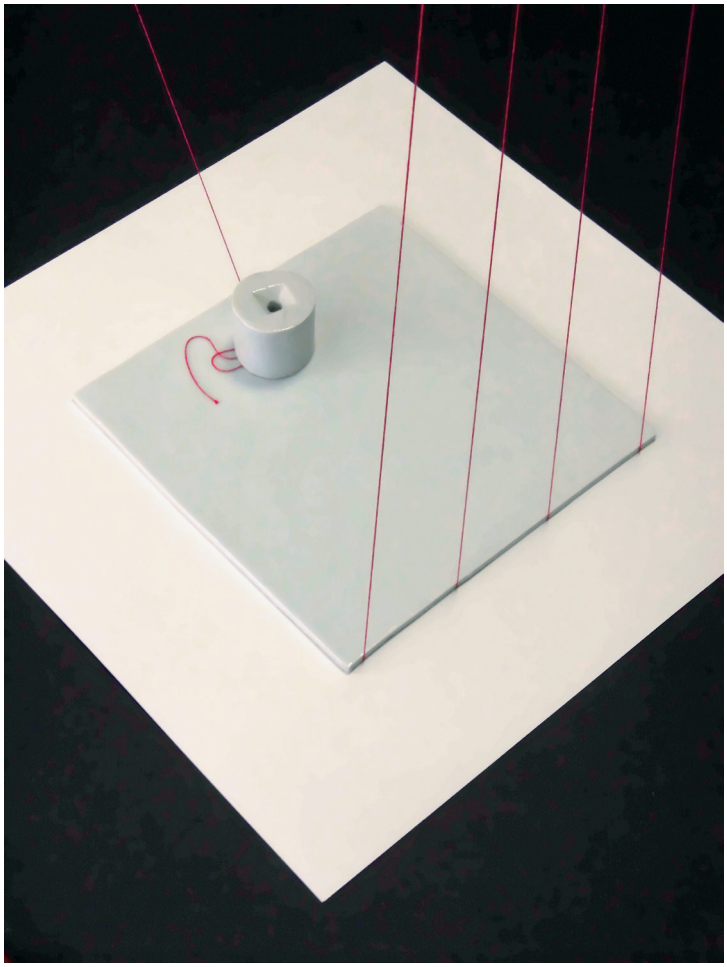
奈野５６１　　高 5cm



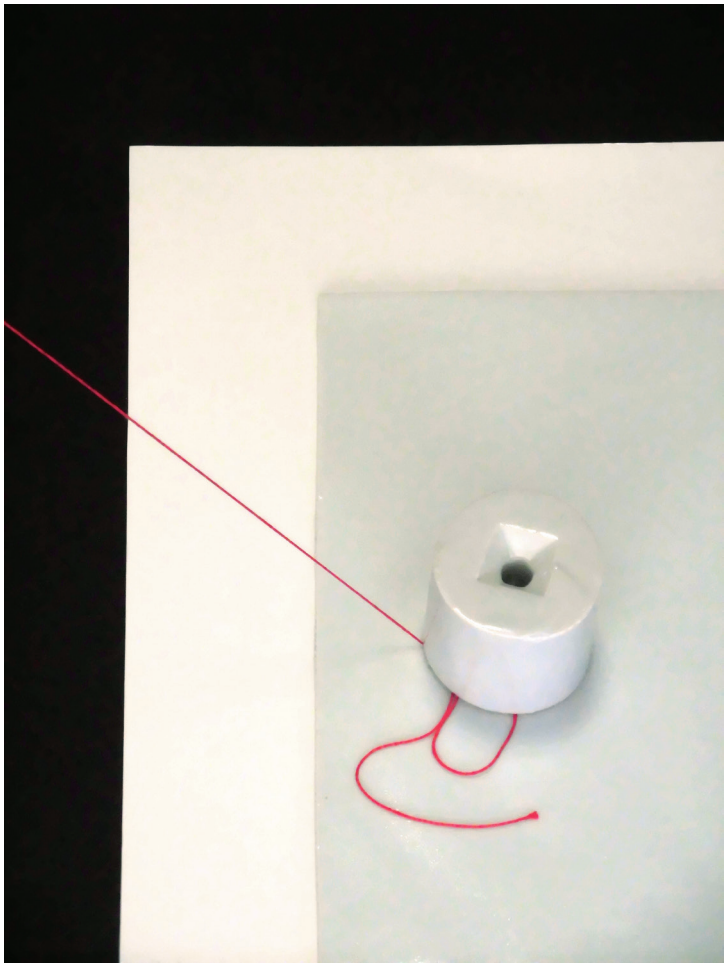
奈野５７０　高 11cm



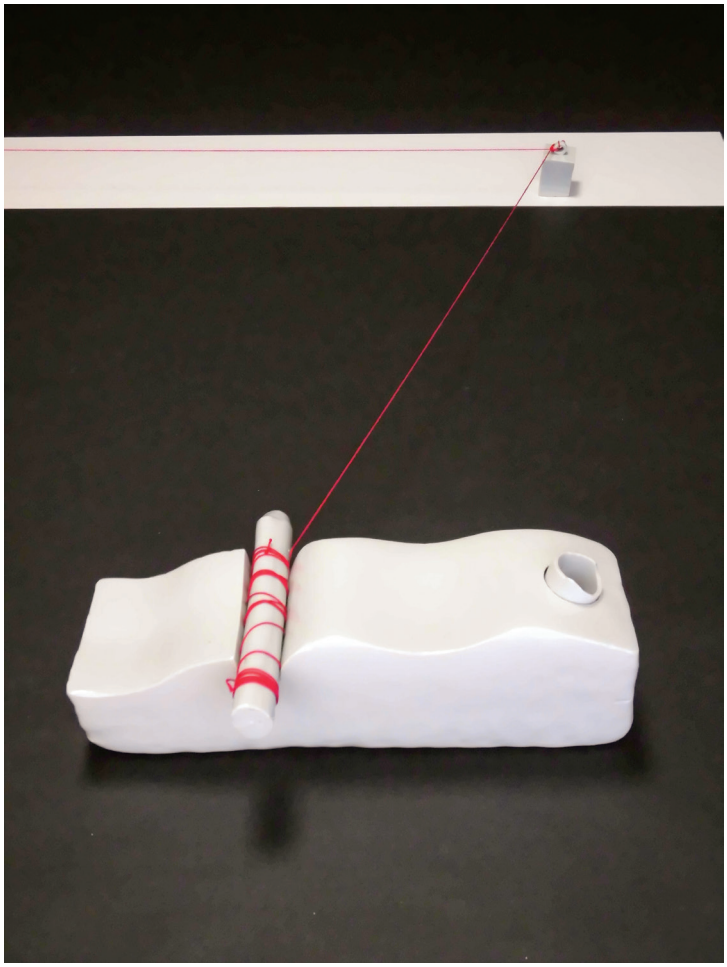
奈野５７０　高 11cm



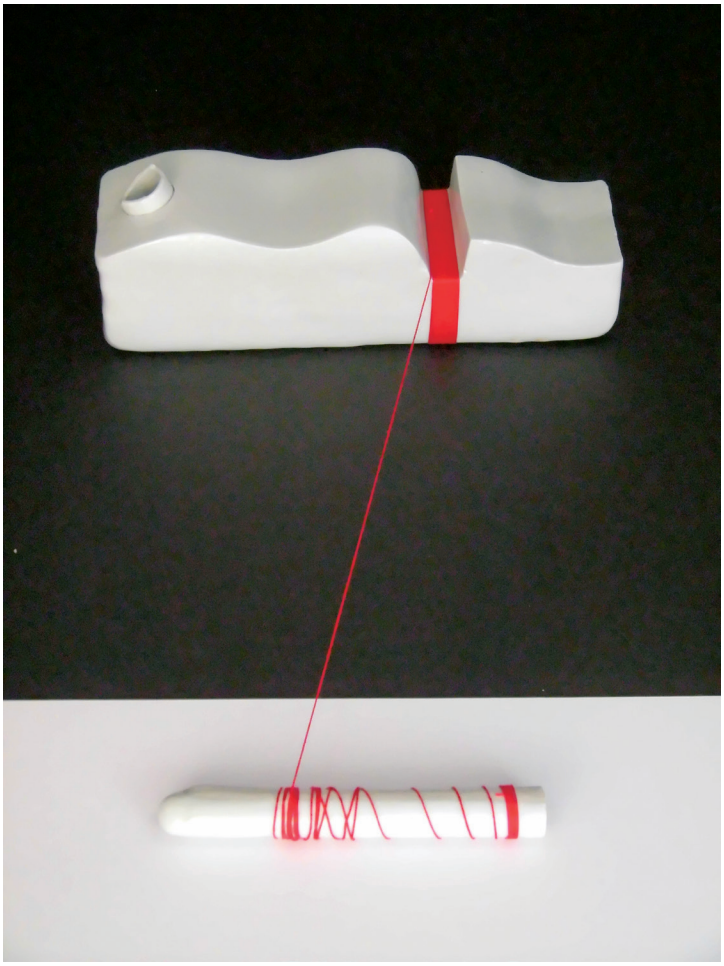
奈野５５９　　高 6cm



奈野５５９　　高 6cm



奈野５６９　高 12cm



奈野５６９　高 12cm